

トポスにおける発達

第 12 回

— 原体験としての幼児期 —

無 藤 隆

幼稚園における保育のあり方を再検討するために、場所（トポス）という観点からその環境を見直してきた。理論的な分析と共に、実際の観察を通して、園における場所のあり方や働きが多様性を探ってきた。本稿では、その連載の最後として、一方では理論的な発展の可能性を「生態学的な心理学」の考え方に求めていきたい。もう一つは、その考えに基づきつつ、幼児期においてぜひとも子どもが関わらなければならない環境の要素とは何かを考察したい。そこから、幼児期の教育がいかなる意味において人生全体の原点をなすかが見通せるはずである。

生態学的なアプローチ

既にアフォーダンス理論や身体知の考え方については触れている。ここでは、その流れに基づきながら、さらに考えを発展させたい。

（主に、次の本に基づく。Reed, E. S. (1996). *Encountering the world: Toward an ecological psy-*

心理学の流れの中では、生態学的アプローチは、人がその身近な環境にいかに対処するかを重視する。

認知心理学で通常論じられるように、認知とは、脳・心がまわりの世界についての表象やモデルを心内に構成することである、と見なすのではない。仮にそういった過程が想定できても、人の認識の要ではない。

重要なことは実際の環境世界の中で人がいかに振る舞い、生存していくかにある。まわりの世界と切り離され孤立した主体と、その主体がまわりの世界についての情報を取り込み情報処理し、心の中で世界についてのモデルを組み立てるといふ考え方は、そもそもその出発点が間違っている。人は初めからその環境に組み込まれており、その環境に適応し生き延びようとするところから変容していく。環境と切り離されて存在しようも行動しようも認識しようもない。もちろん、一人で内に籠もって思考したり、思い悩むことは年齢と

共に生じていくが、それはそれ以前の身近な環境との密接な関わりにおいて生じている思考や感情を踏まえて成り立つことである。そして、一人で考える場合ですら、考える姿勢やワープロやメモなどの道具を必要とし、言葉を声に出して響かせねばならない。

環境との関わりを重視するとは、人の主体性を無視することではない。別なとらえ方をするのである。一つは、前方性とも呼べることであり、将来を見越すという傾向である。現在の環境に関わるのであるが、それは現在の固定した状態をみるというのではない。そこから新たに現れつつある、現れようとしている特徴をとらえようとするのである。第二は後方性である。現在の環境での以前の出来事から現在をみていく。過去を現在の関わりに統合する。この二つにより、現在の環境への関わりがその環境の多くの可能性の流れをとらえつつ成り立つのだということが分かる。

もう一つ大事な主体性の側面が柔軟性ということ

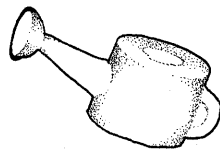
ある。環境へ関わり行動することは、環境刺激への反射とか目標に対する特定の一つの手段を実行するといったことではない。目標を実現するのに常に多くの手段が利用可能であり、しかも相互に交換可能である。環境からの決定論ではないのである。だがまた柔軟性とは単に行動がランダムに変化するということでもない。環境の特定の資源を利用して生きようとする主体側の特徴から生まれている。絶えず、多種多様な資源を利用して生きようと準備しているところから柔軟性は生まれる。

この主体性の考え方からすれば、人は（もっと広く動物は）刺激に対する反応とか、世界に関するモデルとかにより行動しているのではない。絶えず環境に関わっており、そこでの時間の流れの変化に身を置き、十分に適応しようとしている。絶えず生じている環境との関係を調整制御することを、主体としての人は行っているのである。その調整において、環境側にあ

る行為可能性（アフォードンス）のある部分を利用する。

そもそも環境とは生物によって利用可能な多種多様な資源（リソース）に満ちている。穴があるとか、段があるといったこと一つ取っても、それを通して

する際に、様々な利用の仕方がありうる。単に気が付かない。無視する。避ける。その上に乗って降りる。飛び越す。飛び降りる。しばらくそのところにいる、……。切りがないほどあり、しかし、おそらく例えば幼児を考えたときには無限のパリエーションがあるわけではない。ある程度の範囲に納まる。さらに、過去の経験やその直前の出来事、またこれからしようとしていることを考慮すれば、さらに小さい範囲に納まる。だが同時に、その過去や将来は決定的ではなく、常に気が変わり、新たな可能性に



揺れるかもしれない。大事なことは、穴や段への関わりは、その行為の流れの中で生じるということであり、穴や段をどうとらえているかをその穴や段への関わりの現場から離れて論じることはできないのである（もちろん研究上、別に調べることは可能だが、それも現場にいかに関わりを考慮しつつなされることである）。

生態学的なアプローチでは、環境への関わりが環境のあるままとまりとの対応に応じて生じるとする。環境の行為可能性に対応する主体の側の行動のままとまりを考えなければならぬ。心理学でよくいうような行動や認知は単位がしばしば細かすぎるし、環境の構造のあり方を考慮していない。そこで、行動単位として四つ（つ）のことが重視できる。

(1) 生態学的重要な行動とは、その場でまたライフサイクル全体で繰り返し生じるものである。

(2) 特定の局所的（ローカル）な生態場所（ハビタット）

の中でほとんど生じる。別な生態場所に移るのは特殊な行動、特に複数の生態場所の特徴を組み合わせたような一連の行動が必要となる。

(3) 環境側の特に物理的な要素が安定して存在していることに応じて（多くの場合は安定している）、行動も安定して継続ないし反復される。

(4) しかし、一日の変化や季節の変化といったことに對して、行動はそれに對して変化する。

つまり、環境の特徴との対応で行動は検討されねばならない。園環境でいえば、そこでの安定したあるいは周期的に変化する特徴と対応する行動が問題となる。だが同時に、その環境とは主体に対して一方的に与えられるものではない。環境と主体との関係の中で変化しつつ主体に提示されていく。例えば、積み木の組み立てを幼児がしている場合を思い起こせば分かるように、幼児の積み木の先行する置き方でその次の積み木の置き方は変化するし、遊び方も変わる。だが同

時に、積み木を置くこと自体の行為はある範囲に納まるだろうし、一度組み立てが出来れば、その後の遊びはその組み立てによって多少とも制約される。しかも、積み木のように後までしばらくは残りやすいものと、水のように形がすぐに消えるものと砂のように多少は続くものとは後への規定の仕方が異なる。こういった特徴をもつものに対して、例えば、固定遊具とか樹木や部屋の配置などは幼児の時間の感じ方からいえば、ほとんど変わることのないものである。だが、たとえば、そこでの暖かさや影の長さや木に実がなり落ち葉となるなどは、一日の時間や季節に応じて変わることである。

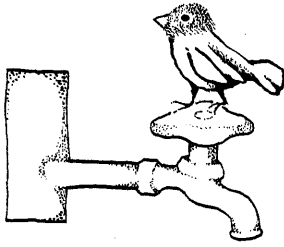
安定した行動パターンがあることは、他の可能性を排除するのではないし、さらには、細かい変動を不可能にするのではないことは何度でも強調される必要がある。絶えず行動には対象に応じて揺れが生じる。それは当然であり、かつまた望ましいことである。環

境はまったく同一であり続けることはない。砂単位でも変化する。まして幼稚園のような場所では大勢の子どもがいて、また保育者がいて、様々に振る舞い、また環境の細部を変更する。さらに、風も吹くであろうし、突然音がするかもしれない。子どもがちょっと姿勢を変えたただけで違うものが目に入ってくる。そういった結果として、気が散ることもあるにせよ、興味深いものに気づいたり、新たな活動の発展が成り立つこともある。

だが、ある種の環境の特徴はきわめて安定的である。たとえば、空があり、大地がある。土があり、風が時に吹き、雨が降って水たまりが出来る。砂場には砂があり、部屋には木で出来た積み木があり、プールや水場には水がある。しかもそれは園固有のことであるにせよ、砂や水や木は他の環境でも出会う素材であり、そこで似たような関わりが可能になるものである。人がいて、微笑み泣き叫び、声を交わす。特定の

人との交わり自体が多くの場合に安定しているが、ど
の人であれ会う人がいるというのは人の社会の根本
的特徴である。

もう一つ重大な安定要因がある。それは人の身体で
ある。どんな環境への関わりにせよ、人の体を使って
関わるのである。ある姿勢を取り、手や足を使い、声
を出したり、表情を現したりして、関わる。また、自
分の体を基点として環境に関わるから、たとえば、近
くのもの大きく見え、遠くのものは小さく見える。



近づけば、遠くのものは大きくなり、以前に大きく見
えたものが小さくなる。主体は環境の中で絶えず移動
し、環境を小規模に作り替え、また新たな環境の面に
気づきつつ、行動している。だから、自分の体への関
係の形成が、環境への関わりとして眺めた場合の人の
発達の重要な側面になる（なお、その際に、環境の特
徴を取り出す知覚に基づく「探索」の働きと、環境の
中で行動する身体行為に基づく「遂行」の働きとに発
達とともに分化していくように思われ、それが幼児の
場合にどうなるのかは重要な問題だが、ここでは割愛
する）。

おそらく、こういった当たり前の事実にも、幼児に
とっての原体験としてそれに対応する「原環境」を想
定できる根拠がある。人が会おうに違いない普遍的な
環境の原点は何かという問である。幼児の保育の問題
とは、その環境において幼児の振る舞いがいかに変容
するかということなのである。

幼児の原環境を求めて

幼児の環境として、物としての環境、人としての環境、日々の活動としての環境の三つの面について考える必要がある。特に、園での物理的環境を念頭に置いて、物としての環境の面をここで論じたい。

人が環境に関わる際に普遍的に存在する物の面をとらえたい。それはおそらく時代によらず文化の変化によらず安定して子どもにとってまた大人にとっても現れてくる物であろう。これまで参照してきたリードの議論では、さらに別な箇所において、次のように、人間の先史時代の生活のあり方にそのヒントを求めて整理を試みている。以下にその整理を紹介しつつ園の保育について適用を考えたい。

まず、基本となるのが、どんな素材を人はその生活の中で利用してきたかである。農業や機械工業以前の新石器時代を思い浮かべると、植物、鉱物、動物とに素材は分けられる。

(1) 植物 木、樹皮、葉、

蔓、草、染料

(に使う物)

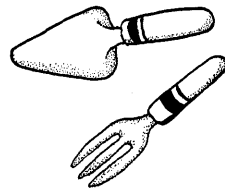
(2) 鉱物 石、泥、水、

土、砂、粘土、

染料

(3) 動物 骨、角、歯、毛

皮、肌、外皮、脂肪、卵の殻、貝殻



原始の狩猟採集社会での素材を挙げているのであるが、それは同時に、人の始まりにおける環境やその環境で利用してきた材料を表すものである。おそらくその材料を利用することが環境における適応であったのだから、人の環境への関わり、言い替えれば人の心に深く、これらの素材の特質とその特質を知ることのできる扱い方が喰い込んでいったに違いない。

次は、(食べ物以外の) 人の環境の基本となる関わ

りの動きのリストである。

属性として、

持続性ー叩く

重量性ー砕く、壊す、細かくする

薄片性ー形作る、先を折る、鋭くする、歯で切る

鋭利性ー引っかく、窪ませる、穴を空ける、切る

染色性ー表面を飾る

吸収性ー吸い取る、洗う

堅牢性ー掘る、つつつく、打つ、届かせる、投げる

形として、

長い+属性のある 結ぶ、縛る、柄をつける

長い+堅牢な 取っ手をつける、届かせる、押

す、投げる

窪みのある 液体を保持する、音を立てる

刃のある 切る、切り裂く

表面として、

なめらかなー粗い こする、磨く、なめらかにする

曲がるー堅い 曲げる、分ける、砕く、粉みじ

んにする

裸のー毛皮の 乾かす、暖かくする

これらは、素材の利用の仕方である。いかに現代の子どもの遊びにおける基本となる動きを思い起こさせることだろうか。

さらに、そういった素材と動きを組み合わせる道具を作ることができる。その道具を利用することで、動きも複雑化する。

(1) 容器 鍋、コップ、ベビーキャリア

(2) 棒 穴を掘る、穴を空ける／引っかく、槍、槍の投

擲器、くまで

(3) 舟

(4) スポンジ

- (5) 櫛
- (6) 叩き切る物 斧、手斧、粉碎する、棍棒、金敷き
- (7) 楽器 笛／縦笛、弦、太鼓
- (8) 紐の道具 わな、網、やな、むち紐
- (9) 着物 身体を包むもの、宝石・装飾品
- (10) 先の尖った物 針、錐、鉤
- (11) 刃のある物 ナイフ、削り取る物
- (12) 染色
- (13) ベッド
- (14) 火

こういった物がすべて今の子どもにとって必要だとか、まして現に用いているというのではない。採集や狩猟の文化にとって必要であれ、現代の文化にはこれら自体は必要ない。だが、その最も素朴な形態、幼児にとっては遊びとして使われる物が実はこのような古くからある道具に類似していることは重要な意味があ

る。

以上のような石器時代にみられるような素材や動きや道具が今の子どもたちにとって「原環境」をそのまま構成するとはいえない。だが、そこにみられる環境と主体とのかかわりのあり方はおそらく人類の最も基本的な振る舞いのあり方を支えており、幼児にとっても基本となるのではないか。少なくとも、その基本を探るための出発点になるはずである。結局、これらが数十万年の人類の生活の基底をなしてきたのであり、たかだか近代になって生まれてきた技術のあり方とは比較にならない根本であるはずだからである。そして、事実、幼稚園の自由な遊びの中で現代の我々は子どもの活動の中に同様のそういった基本となる関わりのある方を見いだすことが出来るのである。

(お茶の水女子大学)